

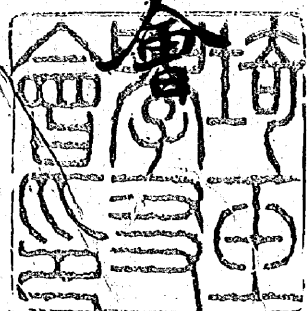
31 2 3 4 5 6 7 8 9 10

明治四十年七月二十八日發行

第十四號

學友會報

埼玉學友會



埼玉學友會記事

目次

會員各位に告ぐ	第四十二回通常會
第十九回大會	會員名簿
會計報告	會則
役員	員

埼玉學友會報第拾四號

會員各位に告ぐ

從來我學友會々報は明治三十二年の交、當時の本會役員諸氏及び熱心なる會員諸氏が激頻なる學業修練の間僅かに得たる寸暇を利用して縣下の有力者の間を誘説して得たる資金を以て一年一回若くは二回の發行を爲し今年に於て實に第十三號の發刊を見るの機運に至たり亦盛なりと云はざるべからず。然かり而して其玆に至れるは一に當時の先輩、役員並びに會員諸賢が熱誠本會を念ふ至情によるものに外ならず、吾人後進は此熱誠と勞力とに對して多大の感謝と深厚なる敬意を表せざるべからざると共に益々奮勵努力して會報の永續と完璧を期すべきは正に吾人當然の職分にして報恩の一端なりとす。翻つて本會の現況を見るに會員の數年と共に増加し會報の部數亦從つて多きを加へ爲めに有限なる資金は本年度に至りては到底獨力會報發行の餘力なきに至れり。此れが善後の策に關し役員、有志共に計畫する所少なからざりき。即ち昨秋九月評議員會は全會一致を以て本會と一身同體の親ある埼玉學生誘掖會に會報合併の議を呈せり。此れ實に會報の永續を謀る最上の策たると共に吾人學生に對して常に多大の同情と熱心とを以て誘掖に力めつゝある一千七百の誘掖會々員諸賢に吾人が都下に於ける活動の一端を報じ一は誘掖會々報により同會員諸賢の現況を承知し以て幾干か先輩と後進との親交に資せんとの意に出でたるなりき。然り而して誘掖會に於ては吾人の意を諒とせられ此提案を快諾し諸般の便宜を與ふる事を承認せられたり。想ふに誘掖會先輩諸氏が繁激なる公務の餘暇を以て東奔西走千障萬難を排して以て誘掖會を設立し寄宿舎の設立。學生貸費等吾人後進に對する誘導至らざるなきに更らに今回の事あり温情の深厚なる吾人感謝の

辭なきに苦む。聊か會報合併の由來を述べ誘掖會。學友會の前途の祝福を祈ると爾云
(註) 本號は都合により單獨本として發行する事となしたり。

渡邊得男記す

第四十二回通常會

明治三十九年十一月十八日、學友會の第四十二回通常會は埼玉學生誘掖會樓上に開かれぬ出席された學生諸君の數は約二百名、先輩には本田博士、諸井領事其の他十六名の來會を忝うした。午後一時開會、先づ幹事渡邊得男君は立つて學友會の盛になつたのは先輩諸氏の熱心盡力せられたのに依る、我等其の後を繼げる者、及ばずながら奮勵して諸君の希望に副はんと云ふ様な意味で、開會の辭を述べられた。續いて長島、太田、福田、諸井、四先輩の演説があり、何れも皆學生に深き感興を與へた様に見受けられた、演説が濟んで餘興にうつる、先づ舍生目崎君が得意の薩摩琵琶、最早黒人の域に達せられた其のお手際の事とて、拍手喝采暫らく鳴りも止まず。次ぎは眞龍齋貞水の日露戦争談である、談はクロバトキン大將の逆襲に梅澤少將苦戰の光景、砲烟彈雨の修羅の巷に、血奔り肉飛ぶの狀、精忠無二なる我が同胞が怨を呑んで死出の旅路に赴くの様、實に壯絶慘絶、二百餘名の人寂として聲なかつた。本田博士の如きは幾度かハンカチーフに顔を抑へられた。之れにて餘興を終り、出席諸君には菓子、せんべい、壽司を饗し、茲に思ひ／＼に火鉢を圍んで快談し砂土原の一角は時ならぬ春風の薫るを覺えた。午後七時盡きぬ愉快を割いて閉會した。

先輩の御演説は其の梗概を左に載せた、速記でないのだから文責は一に記者にある。

長島隆三君 同君は帝國大學出身の俊秀であつて、今や大藏書記官兼煙草專賣局事務官として其の職に勵精せらる。

私の學友會幹事であつたころには、埼玉縣の團結は望なきものとせられました、然るに今日に至つて全國中最も團結の強きものとなつたのは實に驚くべきであります、そして本日(今日)の如く多數の同縣人と、一堂に相會して嬉戲談笑するは大に愉快に感じます。之れから我は戦争後の經濟と學生の覺悟に就て一場の所感を陳べたいと思ひます。

日露戦争に依りて、日本の位置は俄然として其の地位を高め強國となつたが、經濟上に於ては困難なる事情を伴ひ來ました、國債の利子ばかりでも、年に六千萬圓も拂はにやならず、それに陸海軍の複舊とか、滿韓の經營などに金は澤山かゝる。今の所では、金のかゝる方は明に見えて居るけれども、入る方は未だ何ともあてがつかぬ、されど世界的一等國となるには經濟が獨立しなければならぬ。例へて申しますれば、軍艦薩摩がつい此の頃進水しましたが、製鐵事業が日本で出來なければ、海軍の獨立は覺束ない。兎に角日露戦争の結果日本の經營は増して來た、此に於て日本帝國の要求し來たれるものは大事業をやる人と大事業をやるに要する金とである、金があつても之を能く使つて事業を起す人がなければ折角の金も何の用もなさぬ、それと反對に、人ばかりあつても金がなければ働く事は出來ない、然るに金の方の心配はいりません、戦争中外國の資本はドン／＼入り來つて、今日銀行に於ては金が停滯して居る様な有様だ。其他事業の勃興は非常なものであつて、從來の會社の増資や新會社の資金は、最早八億七千萬となつたと云ふ事である、簡様な景氣だから外國の信用は増して來る、其の資本はいくらでも流入するであらう、だから金の方は決して其の少なきを憂ひない。しかし諸君此の金、實に此の大金を運轉する人に至つては甚だ心配である、現に今日會社が出來ても、銀行が出來ても、之れを十分にきりまわす事の出來る人に至つては極めて少ない、南滿鐵道の總裁に誰れがなると見當がつく位少ない次第である。此の人物を養成すると云ふ事が實に刻下の急務である、我が埼玉縣に於て、かゝる寄宿舎を設け人物の養成につとむるは甚だ其の當を得て居る。そして私は其の人となるの資格は、當寄宿舎の所謂寄宿舎要義につきて居ると思ふ。どうか埼玉學生諸君が此の要義を心として勉強せられ、日本が刻下要求して居る所の人物たらん事を偏に希望し

ます。(大喝采)

埼玉學生誘掖會寄宿舎要義を御參考の爲に左に記す

- 一 教育勅諭の聖旨を奉體し至誠以て君國に報ゆべし
- 一 剛毅以て志を立て自重以て事に處すべし
- 一 自ら責むる事厳にして人に對する事寛なるべし
- 一 親愛の情を厚くし共同の精神を發揮すべし
- 一 勤儉を尙とび放縱誠しむべし
- 一 規律を重むじ禮節を正ふすべし
- 一 體育に力め攝生に注意すべし

太田徹君 同君は農科大學實科を卒業せられ明治三十二年より昨年迄米國にありて農業に従事し大に成功せらる。

先目下の大問題たるカリフォルニア州の排日問題に就て述べまじよう、之れをむつかしく云ふ人もあるが、早く云へば日本の幕末當時に於ける尊王攘夷でも云ふべきものでありまじよう、日本が尊王攘夷を唱へたるは黒船を恐れたからであります、米國の排日運動は日本を恐るゝが爲であります。恐るゝも其の筈、我が十萬の同胞が本國よりはビター一文の仕送りも受けずに、獨立して生活して行く點が羨やましく堪らない、また何となくこわい氣持がする、日本人が米國人の競争相手となつたのだから、米國人は利害上より追ひ拂うとした、之れが即刻下の大問題たる桑港事件の眞原因である。日本人で米洲の太平洋沿岸で成功したるものは數ふるに違あらず、其中でも最も成功した二三の人に就き紹介して見まじよう。

光づ長澤鼎氏であります、氏は慶應三年に薩摩藩から派遣せられて英國に留學した、所で日本は維新の大騒亂で上を下への大混雜、氏の學費は途絶へて仕舞つた、氏は大に困窮し米國に押し渡り、葡萄園を開いて遂に大成功をせられた。ある時、日本の海軍將校が氏を訪問した、ところで氏は其の將校に日本の國務

大臣の年棒如何と聞いた、依つていくらくと答へた、所が長澤氏は吾輩は國務大臣にならなくともよい、吾輩の所得は國務大臣の十倍あると云つたそうである。次ぎが大貫氏である、氏は栃木縣人だが非常に海が好きで人であつて、海が見たくて堪らない、海が見たい爲に栃木縣から態々石巻港まで行つた、丁度其の時に材木を積んだ米國帆船が碇泊して居つた、氏は之れに便乗して三ヶ月もかゝつて米國に押し渡り、それから千五百哩もあるアリゾナード迄徒歩したそうであります。アリゾナードには鑛山があるが、氏は此の鑛山の水運びより身を起こして遂には其地の水道會社の社長となり、又電氣鐵道の社長となつた。實に素晴らしい成功である、然るに此處にも例の排日問題が起つて、有色人種を會社の社長に戴くのは白人の耻辱であると云つて非常なる排斥をした。之れが爲大貫氏は居堪らくなつて、遂に家族を纏めて創業の地を立退くの悲境に陥た。聞けば今や布哇に移住されたと云ふ事であり、次ぎに牛島金彌氏であります、氏は福岡縣のものなるが渡米後十年の經營空しからず、今や四百町計りの島を買ひ入れて、之れに自分で命名した、氏はポテト・キングと綽名されて居る、之れ氏がポテトにて成功されたからであります。此の様に米國で成功された日本人は幾人も居ります、之れを一々數へて行つたら際限のない位であります。之れからカリフォルニア州に於ける邦人の農業上の地位を申し上げまじよう。カリフォルニア州の耕地は實に九十七萬五千エーカーなる、此の中二萬五千エーカーは日本人の手に依りて耕されて居る、即ち加州耕地の二分五厘は日本人の耕地である。日本人が耕作して居る地から上がる収入は千百九十萬二千六百圓と計算せられる、即一エーカーに就ての収入は二百弗である、兎に角日本人が加州に於て之れだけの金をつくる、中々豪いものである。米國人が自分から農業をやれば利益ありと云ふ事は十分知つて居る、知つて居つて、やらぬのは農業を營む事を嫌ふからである、其の嫌ふ所以は何であるかと云ふに、馬車に乗りたい、華美を競いたいと云ふ精神から起つて来る。日本人は金がないから骨が折れても馬の尻を叩いて農業する、そうして日本人は農業に天才を存して居る、故に自然金も溜る、成功する人も多い、其の結果や日本人排斥學童放逐となつたのである。桑港附近の我が同胞は、白晝暴漢の爲に金庫を破られて金品を

強奪せられ、夜など外出すれば突然闇より頭をなぐられ、家に居れば投石の爲に窓を破壊せられる。今日我が同胞の有様は實に話にはならん、米國人は自ら文明人と誇稱して居るけれども文明の文の字もない。日本の社會は最早秩序的の社會となつた、大學を出たからと云つて、世人は市長にも重役にもしてくれる氣遣はない、諸君は狭い日本で齟齬しないで、須く海外に發展せらるべしだ、海外と云つても生活程度の低い支那朝鮮などは駄目だ、僕は日露戦争の爲に兵隊に引き出され、滿韓地方を歩いてきた、しかしどこに立脚の地を求めてどうするなんて所は見當らない。僕は支那朝鮮には熨斗をつけられても御免を蒙る、支那や朝鮮では日本で學んだ學問を應用する事が出来ぬ、日本は社會よりも學校の方が遙かに進歩して居る、之れに反して米國では社會が學校よりも進んで居る、だから諸君が學問を米國にやりに行くのはつまらぬ、學問は日本でやつて米國に押し渡り、其の學問を應用されるが宜しい。學校は出て日本に居つた分には藥罐頭が押へて居つて進むも退くも出来やしない、何でも諸君が學問を修めたら、海外殊に米國などに其の力を發展せられん事を希望する。日本人で渡米したものなどは皆夜逃げをした様なものが多し、加州で農業して居るものなどを見るに學問のあるものは先無い、少しばかりでも農業を修めたものは僕位のものである。故に諸君の如く多大の學問を修めて渡米したならば直に頭角をあらはす事疑なしだ、僕は是非諸君の海外發展を希望する次第であります。(大喝采)

福田又一君 同君は埼玉縣出身にして現に東京市會議長代理たり辯護士を職とせらる甚だ令名あり。私の様な年寄りが話をするよりも諸君の如き青年の人より話を承つた方が利益かも知れぬ、然し御希望に依り少しく申し上げます。私は今日の様に有益な話を拜聴した事はない、之れは諸君も同感であらう、近年は學校を卒業する人が大分殖えて來だ、此の多數の學校卒業者を如何にすべきかと云ふ事に就て私も内々考へて居つた、大學を卒業するには中々大金を要する、大金をかけて學問しても其のはけ口があまり思はしくない、折角學問しても實の持腐である、所が只今太田君のお話を承つて少しも心配のない事を感じ

た。諸君は日本で學問してドン／＼米國に押渡り大事業を企てるが宜しい。

私も此の學友會には少しく力を盡しました、回顧すれば誘掖會寄宿舎をつくる事は大問題であつた、私等が學問する時分には保證人を探すに容易ならざる困難をしたものである。今の様に縣下の先輩と後輩とが斯く一堂に會すると云ふ事は夢にも無かつた、可笑しい話ではあるが今日は澁澤男爵が埼玉縣人たる事を知らないものはない、然るに私等の學生であつた頃には群馬縣人は澁澤男爵はおれの縣だと云ひ、私等は埼玉縣人だと云ひ、澁澤男爵の戸籍争をした事がある。然るに今日に於ては、澁澤男爵は最早埼玉縣人と確と決定し、武人としては佐野、淺田兩中將あり、學者としては高田、田口、本田、山川の諸君があつて、埼玉縣と云ふのは名譽の表章となつた、埼玉縣人と云ふのは何だか肩身がひろい。最も愉快に思ふのは此の寄宿舎の出來た事である、到底不可能であると思はれた此の寄宿舎が出來て、斯くも多數の同縣學生が相集つて學友會を開催する事の出来るのは、社會の趨勢がむいて來たのか知らんが今昔の感に堪へない。

兎角青年時代には一躍立身出世をせんと欲するものである、諸君は鈴木兵右衛門君及び其の令弟久五郎君を御存じであらう、御兩君とも投機に於て大成功せられた方であります。私等は若い時分には、豪い人になるには政治家となるべしと思つた、之れ迄は政治家が最も豪い様に思はれたが近年殊に日露戦争の後になると此の見當が少し間違つた様だ。兩宮敬次郎君が還曆の宴を開けば山縣侯が來て祝詞を述べ、又大倉喜八郎君が之れを催はせば大隈伯が來つて演説をされた、そうかと云つて學者や政治家が宴會を開いたからと云つて、山縣侯や大隈伯の來つて演説されると云ふことは覺束ない。此に於て政治家とならんとしたのは少しく其の方向を間違へたと云はざるを得ん。金がなければ仕方がない、此に於て金が欲しい、さればと云つて強盜をしたからとて數十百萬の財産をつくる事は出來ない、(笑聲起る)金がほしいからと云つて、鈴木君を真似てもさううまくはいかぬ。私は先達で埼玉新報を見て感必した、それは別事にあらす、鈴木兵右衛門君が新報記者に語つて、己が投機上に於て少し計り成功したので、此の事が若し世の青年の心を投機に誘致せしむる事ありとせば、己は天下の大罪人だと云はれた事である、之れを以て見れ

ば、恐らく鈴木君も此の事を善とし奨励せんなど云ふ事のないのは明な事である。それにある人が成功したからと云つて、萬人が其の跡をついで成功するとは限られない。米國あたりでは一にも金二にも金で黄金萬能だと云ふ事である、米人某の言に大學などに行くものは馬鹿だと云ふ事がある、之れを以て見ても、學校などで勉強するよりは實地にやれと云ふ氣風である事がわかる。日本が假に此の氣風となつたらばどうであらう、日本が教育を輕んじて只金と云ふ氣風となつたらち、我が建國の基礎を危うくしまいか、武士道より金、義理より金となつたら、我が國風教上どんな變化を起すであらうか、何しても世間があまり財力々々と呼んで來た、勿論ある程度迄は財力がなくてはならぬ、しかし深入をせぬ様に制限しなければいかぬ。社會は貧富の懸隔、益々甚だしくなつた、懸隔のあまり甚だしくなるのは決して喜ぶべき現象でない、之れをして非常なる懸隔ならしむるは教育の力にある、總體に教育殊に普通教育を施すにありと信ずる。何れの國を見るもあまり金に走り過ぎると教育を輕んずる様になる。米國の様に、今日は財力財力と云ふ聲があまり大き過ぎる、之れは實に時弊である、どうかして之れを矯正したい、之れを矯むるは實に諸君の決心にある。(大喝采)

諸井六郎君 同君は誘掖會理事諸井恒平君の令弟たり領事として久しく白耳義に駐劄せられ本年歸朝せらる。

私等が學生で會を催はす時分には、どうか十人も出席する人があつてくれればよいと思つた位である、縣下出身の先輩も後進子弟を誘掖すると云ふ様な事はしない、又後輩は無氣力で駄目、到底埼玉縣人の團結は望みなきものとせられた。然るに私の滯歐中埼玉學生誘掖會と云ふものが出來たと云ふ事を聞いた、どんなものが出來たかと思つて居つたが、今面のあたり之れを見て一種云ふべからざる感慨に満ちた、夢であらうか、否夢でない、埼玉縣人の團結は望みなきものとせられたのに今かゝる寄宿舎が建設せられたのは實に愉快である。しかし未だ之れに満足してはならぬ、益々之れを發達せしめたいものである。

文明の教育を受けたものにも論語を読むの必要がある、ロンドンパリーの真中に行つても、論語を讀んで得る所甚だ多い、私等は學生時代にスマイルの自助論を讀んだ、自助論に書いてある事は今日英國に行つて見ると全く其の通りである。而して自助論と孔孟の教とは同じ事だ、文明の教育を受けたものにも孔孟の教旨は金科玉條であると云はざるを得ん。如何にも金は必要である、衣食足つて禮節を知ると云ふ事あり、太田君のお説は至極結構である、福田君の折衷説は至極賛成である。埼玉縣人は都會の感染を受けて居る爲か大人物が出ない、規模が小さい、不眞面目である、我が國は之れから益々世界的大人物を要求する、どうか諸君も世界的大人物とならん事を深く希望する。(大喝采)

當日出席會員諸君の芳名左の如し

特別會員

小林 平八	小暮 濤太郎	淺井 延次郎
諸井 恒平	福田 又一	長島 隆二
諸井 六郎	本多 靜六	塚元 文衛
中村 林盛	諸井 四郎	林 彈作
山中 隣之助	栗原 文吉	辻 村鑑

通常會員

若山	德(一高)	石井	保(一高)	酒井忠	政(帝大)	金子茂	八(一高)
小林	要三(商船)	渡邊	義治(高師)	酒卷貞一	郎(一高)	卜部義	雄(一高)
小林	豐(高師)	堀口	一郎(高師)	柴崎	金藏(一高)	畑義	三(帝大)
柴崎	長雄(高師)	馬場	勝藏(高師)	神谷	新吾(慶義)	加藤	道哉(慶義)
中山	秀道(東師)	武田	進(曉星)	菅谷	隆良(慶義)	北野	貞作(慶義)
川島	達雄(曉星)	須賀	一郎(早實)	江森	安治(慶義)	船越	藤吉(四中)
江利川	晴永(臺協)	小島	暉(高工)	立石	四郎(高商)	今村	正一(臺協)
鯨井	修三(早大)	增永	耕三(東師)	長谷川	錄郎(臺協)	渡邊	秀雄(帝大)
吉田	忠太郎(善隣)	山田	耕夫(獨協)	川島	祿郎(一高)	梶田	鯉一(早大)
石村	政次郎(帝大)	山上	謙吉(中央)	齋藤	綱吉(早大)	桑原	政夫(臺協)
根岸	憲助(學習)	遠藤	勘一(慈惠)	橋本	傳左衛門(一高)	中山	賴道(陸幼)
田中	文勝(高師)	早野	清三郎(高師)	榎崎	主計(帝大)	宮	寬道(帝大)
關野	九郎(四中)	府瀨	川熊司(高師)	栗原	利三郎(早大)	根岸	道三(成城)
丸木	清(獨協)	原田	操(獨協)	田村	英雄(早大)	福田	辨次郎(早大)
伊井	松藏(高師)	金子	五郎(早中)	梅澤	治平(高工)	福田	安武治(大中)
石田	政藏(帝大)	鯨井	清太郎(帝大)	小林	昌貞(早大)	岡安	寬司(京中)
川田	長兵衛(高商)	馬場	好平(臺協)	大山	昇平(高商)	山田	文治(獨協)
小野	澤竹七郎(臺協)	松岡	猷(臺協)	川岸	丈助(正豫)	山田	良慶(高工)
渡邊	佐恵智(慈醫)	秋山	峯作(東師)	本橋	彌八(高工)	齋藤	貞七郎(高工)
齋藤	泰(東師)	山口	政二(一高)				

森田	增五郎(商船)	長谷部	正平(臺協)	秋山	榮次郎(早大)	梅澤	平(早大)
生島	藤三(一高)	渡邊	保治(早大)	網野	六治(早大)	柿沼	邦司(早大)
武島	朝義(商船)	吉岡	來治(早大)	栗原	惣良(早豫)	關口	四平(早豫)
角田	鶴雄(水講)	堀谷	豐三郎(一高)	岡野	益三(早豫)	堀越	利(早豫)
梅村	篤郎(幼年)	栗原	斐(臺協)	大橋	完一(外國語)	中村	鐵也(帝大)
田口	善吉(帝大)	須藤	哲三(東師)	須田	大助(錦城中)	菅間	泰(高商)
橫田	健一(高商)	馬場	五郎(臺協)	小崎	安藏(高商)	青木	槌太郎(高商)
木村	兵太郎(士官)	野口	誠(幼年)	澁谷	南陽(高商)	遠藤	柳作(帝大)
大野	仁助(商船)	柴崎	房藏(早大)	齋藤	三三(帝大)	增永	茂重郎(帝大)
赤坂	芳次(外語)	須賀	英一(一高)	高橋	隆造(帝大)	中尾	參三(獨協)
伊藤	鶴作(高工)	新井	義平(一高)	柿原	清二(早豫)	日向	淺松(早豫)
眞田	(一高)	鈴木	利彦(早中)	小林	浩吉(早中)	市川	平一(獨協)
鈴木	恭助(京北)	山口	彌五平(正英)	黑澤	秀吉(獨協)	石川	誠一郎(獨協)
大河	原孝吉(早實)	市川	久次郎(早實)	増田	近(開成)	濱田	寛治(第四中)
梅澤	久平(早實)	馬場	佳輔(早實)	柳澤	英一(開成)	竹内	實(順天)
相澤	公平(早實)	發智	神太郎(高工)	金子	元春(獨協)	高橋	賢次(京華)
丸山	照六(正英)	古市	勉(高工)	岸本	庄太郎(京華)	齋藤	長六(早豫)
須永	義一(大成)	梅澤	慎六(早大)	松井	良治(明大)	大島	卓彌(正英)
新井	平三郎(早大)	鈴木	易三(早大)	松村	喜繁(國民)	山田	醇(學習)
藤村	篤治(早大)	青木	清司(早大)	澁澤	虎雄(早豫)		
岡田	萬雄(早大)	進藤	光五郎(早大)				

第拾九回學友會大會の記

紀元節だ、例によつて寝坊した、學校の式に後れて出なかつた、ストーブの傍で「綠葉集」を讀んで居る中に十一時だ、驚いてお茶の水から牛込見附まで甲武線の電車に乗つた、速いものだ、見る／＼外濠線の電車を追越すから愉快だ、冷たい空に迷ふ砲兵工廠の煙を眺めて居る中に最う牛込見附へ投出された、春さしいへど未だ寒い、風邪氣味な僕には堪らない、然し久瀨の戀人の家に尋ねて行くのだから足も自つと早まる來て見れば豈圖らんや吾輩が先鋒だ、機先を制した譯だ、然し手持無沙汰だ、勝利の悲哀を感じる、これは什麼しても僕の年代記に特筆大書すべきだと北叟笑む未だ誰れも來ないから某君の室に飛び込んだ、無聊の餘りに本箱を索したら柄にもない「病間録」を持つて居る、その一節を爪繰つた、何時讀んでも神經質だ、病的な文だ、然し面白い、默想に耽つて居ると懺てチリン／＼ホールに集まれといふ、火鉢を抱いて席に着いた、成程最う百人以上も來てゐる、寒いが瘦我慢して豪然と座る、然し寒い、身體が細かく運動する。窓の外では風が白

吾々學生が立身の秘訣は常道を取りて勉勵し、苟も好機を逸せずに進め、然し人生は聖者必ずしも榮えず、惡人として必ずしも亡ぶる者でない、故に不遇の境にあつても決して自暴せず、天職を力めて風雲を待て！といふ意味であつた、實に頂門の一針だ、かく意識してこそ吾等は悶も不平もなく、此世を面白可笑しく暮して行けるのだ。こゝに國家の發展も期して待つ可きである。

君が代……………二回。
勅語奉讀……………濹澤會長。
優等學生賞與式。

間もなく濹澤男の「目下の經濟界に對する覺悟」てう一條の演説があつた、先づ斯界の歴史、現今の趨勢新會社の勃興する原因に説き及び、商業道德の痛く敗類した事を慨し、商業と道德とが並行して發達して欲しいといふのだ、元來僕は斯ういふ方面は縁の遠い方否寧ろ全く門外漢であるが、お蔭様で現今の實業界、起業界の事態も少々解つた。

大審院判事志方銀氏は「孝子雨田五郎之傳」を頗る精細にお話しされた、事實の餘りに悲哀なのに皆不覺涙をこぼした、この涙こそ誠に尊き男子の涙で

い奴を飛ばす、番町あたり高く鳶が吹き飛ばされさうに舞うて居る、何時でも元氣な奴だ、又考ひ込む、突然拍手の音がする、間の手に苦音機が始まつた、どや／＼入場するので一向に聞えない、残念だ、然し皆喜びの餘り無意識に出す聲だから致方ない、好きな「追分」も縁に聞けないので涙をこぼしはぐつたのは千歳の遺憾だ、が「笑」だけに吐き出した、見渡すと知つた顔があつちにも此地にも居る、相見て微笑する、これが禮なのだ、簡單な物だ。

懺て幹事の開會の辭がある、何時も乍ら魔力のある雄辯には魅せられる、學友會史と維新史とを比較されて、理想に到着するには自覺が必要だといふ意味の言葉に結された。

次は會務の報告として各學校本年度の卒業生諸君の芳名を朗讀された、兄様たちの目出度い門出だから實に嬉しい、僕等も一憤發！と思つた。

其れから卒業生總代辻村鑑君の答辭があつた、温厚な、簡單な言葉を僕は誠にゆかしく感じた。

愈々先輩の演説が初まる、登壇されたのは加藤代議士！僕はこれが初對面だ、温顔疎髯の人、一見東郷さんに似て居る、題は「日進の時勢」といふのだ。

ある。これが懺てゆかしき大和魂の精華を致すのだ。

悲しい「血寫教」に泣いた僕等は忽ち尾高二郎氏の「韓國談」に笑はされた、永く韓國に往來されて彼の國の殖産興業に經倫されて居る間の精密な觀察を、破天荒な、奇抜な警句で話されるのだから堪らない、聞いて愉快だ、従つて印象も深い。僕は時に此處のも宜いと思ふ、大いに歡迎する、尙氏は我が學友會の創立者の一人として忘るべからざる方ださうな。

最う日が暮れた、ランプが點く、暫く休憩だ、冷たい鮎を頬張り乍ら震へて居る者、他人の煎餅を攻撃するとしてひしめき合つて笑ふ者、ビーヤホールに肉迫してはる酔心地の蹣跚と席に歸つて來る者、秋の草紅葉の様な先輩の顔！ランプの燈火に照らされて火の附きさうな誰れかの禿けた頭！何處を見ても皆莞爾とじて居る、世は長閑な春だ、實に歡樂の極みである。

此處へ燕林の講談とお出でなさるから益々妙である僕は元來講談が好きでよく何々亭の暖簾をくぐり、殊に燕林の「高田の馬場」は三度も聞きに行つた、宜いものは幾度でも宜い。今日は「義士薪割之

傳」と云ふのだ、一度聞いた事はあつたが今日は心地宜かつた故が一段とよう御座つた。講談とし云へば一口に賤しいものゝ様にあげつらうものがあるが僕は此様な無邪氣な安値で、薩張りした愉快なものは無いと思ふ、永く世人に愛顧せれるからには其處に捨てがたい或物が存するからである。急霰の如き拍手で幕。

次は一高諸君の催にかゝる余興だ、拍子木か調子よく響く、惚れつく様な聲で「ニシビール軒」と呼出しの聲だ、何んた角力かなと思ふと幕の内では二三の者の笑聲が漏れる。急性な僕は待遠で堪らぬ。幕が開くと驚いた、奇想天外とは實に是れだ。丈餘の力士が眠寐氣たのか寐卷の儘、ヨイサ／＼！行事か動物園の猿の様にチヨロ／＼飛び廻つて居る。拍手起る……幕。

次は目崎君の「櫻狩」だ、已に堂に入つて居る、あの朗かな聲が實に宜い。

又燕林の「豊太閤故郷之錦」があつた、當時の武士の如何に無風流なるかは見える、例の太閤の「夢」がし口に一杯頰張つて思ふ様にはいはれさりけり」などは、よく藤吉郎の性格が窺はれて面白いではないか。

する三吉の心根は何處までも可愛い。梁上の塵も爲めに舞ふ様な玲瓏たる胡弓の音に、法廷に列せる判事、呼出し查公、傍聴などが又も夢で舞り出し、各よろしき狂態の介あつて……幕。僕は此様な呑氣なものは大好だ何故好きだ？理由は無い、只好きなのだ。兎に角成功した、毎日新聞や文藝協會の「文士劇」の連中も洗足だ、この際大いに諸君の技を練られん事を望むのだ。

最う八時だ。未だ色々面白い事があるとの事だが、風邪の爲か頭痛がする、我慢すれば出来ぬことはない然し元來我慢することが嫌な男だ。歸らうと思つたら、ビィヤホールへ引き込まれて、大いに開こしめした、外へ出た。暗い。寒い、星も稀れた、夜の都大路は寂しい、足が震ふ、牛込見附から外濠つた、酔つた、身體全體の血が頭に逆襲するかと思はれる程、首のあたりが混雜して居る、目が暗らむ、前へよろけさうだ、致方がないから窓にしがみ附いてようやく歸つた電車から降りて什麼したか一向覚えがないが、兎に角自分の室に歸つた、腹は満ちた。目の皮はたるんだ、寐た、夢を見た、然し何んが忘れた、呑氣なものだ。

いか。

待ちに待つた舍生諸君の催にかゝる狂言「浮れ胡弓」が始まる、僕は嘗て其筋は讀んだ、だから一入待たれた、實に此様なのが猫さんの所謂非人情な物だ。

初幕の三吉は科も介も上々だ、主人はスタイルの苦心は感服したが、科白が少し如何と思ふ。二幕の舞臺のバックに長閑な田舎道を見せ、三吉が無心に僅か三錢を乞食にくれるあたり、よく三吉の性格が表はれて居る、最後の乞食が神様であつて三つのギフトを授けるなどは狂言だ。神様の科白やスタイルは苦心の跡が見えた。三幕では幸運な三吉が紳士の出立ちで元の主人に邂逅し、無慾の爲めに幸福な境遇になつたと物語るあたりは流石に旨い。一曲の浮れ胡弓に主人がチャームされて浮れ舞る。壓めて大いに怒り折柄來た巡査に訴へる。この查公のヂィスチャアは實に眞に迫つて居る、或は経験がある人かも知れぬ。

終の幕は法廷の場。三吉は風紀を亂す廉で死刑の宣告を受ける。あはやギロチンの朝露と消えんとした時今生の思出に今一度胡弓を弾かして、いと哀願

(紀元の佳辰の翌朝 忘憂生)

當日優等學生として賞品を授與せられし諸氏の芳名は次の如し

浦和中學校	永瀬寅吉
熊谷中學校	渡邊寛一
川越中學校	加藤長吉
粕壁中學校	桃木長吉
附屬中學校	齋藤辰之助
第一中學校	加藤輔明
早稻田中學校	小林浩吉
京華中學校	石垣清三
商工中學校	吉田圭三
日本中學校	蕪木直衛
郁文館中學校	富永齊
成城中學校	根岸直三
立教中學校	岡田理三郎
正則中學校	館野文作
曉星中學校	植竹隆文
順天中學校	中里隆治
早稻田實業學校	大河原孝吉

京華商業學校	大島重吉
京北中學校	森貫一
東京府師範學校	中山秀道
埼玉縣師範學校	松崎庄五郎
獨逸協會中學校	金子元春
東京第二中學校	杉本重平
錦城中學校	須田大助
埼玉中學校	増田知定

當日會頭の演説の要綱左の如し

「目下の經濟界に付きて」

私は本日別には是と云ふ纏つた演説は致されぬ、それと云ふのは此頃非常に忙はしく、現に今朝なども訪問者が詰め掛けて居つて遂に定刻に遅れた次第で、何分腹案する暇がなかつた、されば自分が常に關係して居る經濟界の事でも御話し致して將來斯界に向はるゝ皆様の參考に致さうと存じます先づ經濟界に對する皆様の覺悟とでも申して宜からうと思ふ。

此の經濟界も國の進歩と共に時々刻々發展して居

なり、經濟界は大打撃を被りました、戦役後即現今の經濟界の趨勢は實に奇妙な現象を呈して居りまして未來の事は私などにも一向解りません。然し新會社の設立は最目ばしい事柄であります、此の會社の設立の原因には種々ありませう。

けれども從來所持せし高い株を賣つて格安の新株を澤山求め様とするのも一の原因と思ひます。私なども新會社の設立は甚だ宜いと思ふ、併し新事業には時には随分損もありませうけれども亦事業を爲には其不足を補つて行かねばなりません。轉ばぬ様に寐て居れと」曰ふ人があるがこんな安全の計のみして居る石橋論者は共に語るに足らぬのであります。

世の中は私共の思ふたより進歩いたしました、例の電車なども創立の際には如何と思ふたのです處が存外世の需用に適して相當の利益配當もある様な譯で高架鐵道や地下線なども出願するやうになりました、兎に角充分の自信があつて始めて會社などは起すべきもので決して「他人の禪で角力取る」様なことは致すまじきことであります。

實業の進歩、商業の發展は誠に賀すべきであります、商業の道徳は反比例に衰頹する感が致します

ります、が常に同じ歩合で進歩發展するもので御座らぬ、世の中いづれの事でも左様であるが、苟も意識あるものは同じ度合に行動いたしません。殊に今日には最も急激に進歩しつつあるのであります。經濟界の原史を回想して見ますに、日清戦役より現今迄如何なる経過をいたしましたか、實業界が世に重ぜらるゝに至りましたのは明治二十年前後からであります、それ以前は申す程の事もなく取分け舊幕時代などは頗る陋劣なもので尊重せらるゝ値もないのであります。國威の進暢には政治も必要、軍事學藝も必要であります、同時にこの實業も亦必要なるものであります。日清戦役頃の經濟界には二つの重なる傾向がありました、一は可及的正格安全を主とし、一は可及的急進積極を主と致して居りました、正格派は急進派の突飛な活動を見ては非常に悲觀しました、殊に三十一年頃は急進派を大いに非難して居りました、然し乍三十五年頃金融が閑慢になつて商工業に別には是と曰ふ目ばしい事もなく過ぎましたが三十六年に成りますと少々事業が起らんとする傾きを示しました、海外事業即支那朝鮮などに於ける經營を重く見る様に成りました。こゝに於てか日露戦争と

これが相互の不信となつて斯界進歩の爲めには實にゆゑしきこととなりはせぬかと憂ひます今迄の商人には無教育なものが多く、然し今後は教育もあり、人格もある皆様がこれに従はれることであれば、商業の擴張と道徳の進歩と程よく並行して發達せられんことを切に希望いたします。(文責記者にあり)

當日來會々員諸氏の芳名は實に次の如し

特別會員

尾高次郎	田中萬
尾高彌五郎	加藤政之助
佐野靜雄	高橋重藏
中村林盛	宮内翁助
中村三郎	中村孫兵衛
飯島安人	諸井六郎
諸井四郎	淺井延次郎
石山彌平	卜部喜太郎
福田又一	志方鍛
林彈作	土肥秀丸
高木金之助	四王天延孝

久米幸三郎	本多靜六	茂木等	吉田圭三
田島竹之助	小山平八	淺見光三	淺見平三
小暮壽太郎	諸井恒平	小林浩吉	金子善一
長島隆二	塚本文彌	富塚喜富	關口七郎
山中隣之助	栗原元吉	渡邊保治	臺惣三郎
鈴木恭介	山口彌吾	川島祿郎	栗原惣三
大河內孝吉	野本德治	島村節	板橋健三
梅澤久平	馬場佳輔	松永德三郎	松浦忠治
發知神太郎	丸山照六	白石德重	中山秀道
增田耕作	須永義一	須藤哲三	小林豐
栗原愁良	梅澤慎六	永瀨寅吉	齋藤辰之助
新井平三郎	鈴木易三	齋藤明之丞	長谷部正平
須田大助	菅間泰	武田晉	井上暹吉
關口四平	中村鐵也	關根恒三	中村九平
遠藤柳作	田中七郎	本橋彌八	本橋重治
岡野益三	堀越利	木村恒	生島莊三
大橋完一	杉浦仲太郎	山下勅之助	水村宇一郎
古市勉	田中寬	田島鍊三	笠原義平
橋村正夫	中尾參三	菅谷隆良	江森安治
柿原清三	日向淺松	神谷新吾	松本清司
齋藤長六	金子鯉吉	藤村篤治	岡田萬雄

高橋隆三	新藤光五郎	市川久次郎	梅澤重平
秋山榮次郎	野尻貞衛	加藤輔明	宮崎一
吉岡寛作	鹽見勝造	松井良治	大家勇
柿原萬三	福島勝三	大島卓爾	青木穂太郎
栗原定右衛門	伊藤鶴作	金子元春	相澤公平
福田辨次郎	宮本保	小山鞆繪	松村喜繁
眞名田隆一	增永茂重	大野仁助	新井元郎
栗原利三郎	武田辨三	加藤武三	梅原一郎
大野榮三	渡邊義治	桃木長治	石村政二
宮前進	市川平一	齋藤恒清	蛭間源一
黒澤秀	石川誠一	植竹隆三	關野九郎
目崎得義	目崎守義	增岡三吉	坂本宗太郎
増田近	松崎庄五郎	關根治作	畑高
丸木清	山口良慶	畑義三	長田品勤
齋藤仙三	武島朝義	伊井松三	德橋芳三
松本重平	酒卷貞一郎	本間武四郎	木崎多助
下部義雄	茂木金藏	吉岡長四郎	小林要三
高柳賢三	齋藤貞七郎	栗原千代吉	新井正枝
金子茂八	諸井貫一	鹽谷覺三郎	杉山一郎
諸井桃二	柳澤英一	湯淺泉	角田鶴夫
齋藤長六	齋藤毅一	川島達夫	

福島 義治(水講) 小池 敬爾(獨協)
澁谷 南陽(高商) 山口 八五郎(京中)
山岸 博愛(獨協) 岸本 庄太郎(京中)
加藤 正近(京中) 川邊 喜三郎(早大)
梶田 鯉一郎(早大) 佐々木 徳正(一高)
大野 緑一郎(一高) 小池 直次郎(帝大)
竹内 實(順中) 山口 田醇(學習)
ト部 堯亮(獨協) 山口 亮一(獨協)
柴崎 房藏(早大) 澁澤 虎雄(早豫)
飯島 博

會員名簿編纂につきて

我學友會が明治二十二年に創設せられてより年を閱みする事實に十有九年。其間に於て通常會員たり、業了へて更に特別會員たり、又或は本會創立以前已に社會活動の中において特に本會の主旨を賛し席を賛成會員に列せられし人々數へ來らば實に二千の多きに達すべし。然り而して其芳名は當時の記録等存するなきに非ずと雖も其詳細に至りては此れを知るに由なし。吾人以て竊かに恨みとなしき、會員名簿の編纂此れ誠に當然の會務たりと雖も會齡已に二十

に達し數千の會員を以てししかも入退會の手續明確ならざる我學友會に於て完全なる者を造らんとせば頗る難事に屬し吾人の不肖一朝にしてよくし得べきに非ず。今回の企の如き固より間然する所あるは論なしと雖も。會員諸君が此れによりて以て幾干か利する所あらば吾人の光榮此れに過ぐる者なし。時恰も學年の始めに際し當該學校の整理未だにして不明なるもの又は全たく知る能はざるもの存し。其然からざるものと雖も尙脱漏誤謬の不少は一に吾人不肖の致す所大方の寛恕を希ふと共に其訂正完璧は此れを他日に期す。

特別會員 (順序不同)

(專門學校卒業生)

東京帝國大學

横山 鐵太郎 野崎 新太郎 田島 彌三郎 市村 富久
長谷川 道也 淺井 延次郎 福田 庫文司 齋藤 宗四郎
諸井 四郎 松本 和三郎 宮城 長五郎 八木 橋克彦
金子 直 志方 鍛 矢作 榮造 諸井 六郎
竹井 耕一郎 野口 弘毅 橋本 利論 岡戸 諭介
長島 隆二 山口 庸三 若林 仁作 (以上法科)
山本 次郎平 山村 直次郎 笠井 銀之助 齋藤 甲子太郎

石原 久 木林 麟太郎 吉澤 正雄 三浦 操一郎
稻葉 良太郎 齋藤 泰三 綾部 利三郎 福田 謙之
井原 良太郎 伊丹 繁 植竹 一陸 竹澤 保之介
橋本 正直 小山 憲佐 榎本 基重 増田 二郎
野口 秀一郎 (以上醫科)
町田 諄 (以上製藥)
加藤 興之吉 今泉 安之助 渡邊 六藏 荒井 鈞吉
栗塚 又郎 下山 秀久 石原 正治 増田 重吉
大塚 鷺五 山本 開藏 椎橋 忠作 山川 義太郎
渡邊 説三 澁澤 元治 岸 眞三郎 清水 十二郎
田中 芳雄 大澤 直重 飯島 光 山口 義勝
長谷川 恭平 (以上工科)
黒川 雲登 高橋 重藏 羽島 又次郎 武内 大造
藤野 三郎 齋藤 阿具 若守 義孝 松本 喜一
東 尚胤 辻村 鑑 栗原 元吉 (以上文科)
佐野 靜雄 山川 弘毅 須永 鈴太郎 腰塚 英
(以上理科)
芳賀 權四郎 林 彈作 内山 定一 花井 藤一郎
石坂 楠樹 富永 升 稻村 量平 本多 靜六
久米 幸三郎 野部 肅 (以上農科)
早稻田大學
齋藤 忠太郎 鎌田 應助 菅間 徳次郎 坂齋 道一
永島 富次郎 三田 幸司 星野 浦吉 高橋 莊平
中村 唯五郎 小島 儀助 島村 作太郎 松岡 三五郎
高橋 成章 長本 近之助 大澤 駿三 堀越 寛介

田中 唯一郎 尾澤 覺三郎 女部 田徳松 石坂 靜一
小島 佐五次郎 田村 衡 小林 濱次郎 久保 良平
坂本 七三郎 長島 律太郎 石井 孝之助 小林 藤次郎
赤沼 常吉 種村 宗八 齋藤 爲治 倉林 次郎吉
小林 利十郎 横田 四郎 平澤 三郎 高柳 織之助
吉田 定助 中島 初治 山下 雪次郎 井出 門逸
澁谷 潤 木村 眞一郎 田村 街 江森 角三郎
塚越 又四郎 三澤 常太郎 岡田 大四郎 儘田 甚太郎
細井 爲五郎 只見 進 角田 美之助 田村 雅之助
杉山 俊之助 太田 玄綱 井上 精一郎 森 賢司
岩井 義吉 齋藤 英作 木村 慎一郎 小林 哲
龜井 伊助 新井 幸三郎 岡安 利平 関口 國作
大矢 敬香 新井 好太郎 森田 廣吉 鈴関 辰太郎
加藤 勇三郎 新野 善平 折原 徹二 黒澤 昇治
小川 儀平 鈴木 浩一 金子 千十郎 近藤 巳和之助
中野 準三郎 加藤 龜之助 野原 吉太郎 辰井 國治
府川 直二 鈴木 莊四郎 原 巖 栗原 宗次
關根 仁藏 敷地 周平 橋爪 甚平 神岡 文章
島田 六平 井上 之水 須田 證太郎 久保 傳平
門井 東一 千代田 惠三郎 奥田 卯之助 田村 信一郎
深井 章 岡戸 宗七郎 東角 井順臣 吉田 修一郎
井原 貞亮 金子 與惣平 関口 盛一 大島 親貞
高柳 寛三 今西 長一郎 坂本 隆昌 京谷 勇次郎
林 承輔 福田 貞甫 小暮 成嗣 石井 茂兵衛
杉田 運法 小嶋 龜十郎 田中 靜藏 野原 新太郎

御菩薩地藤造	武井多三郎	豐田兼通	內山富治	諸井孝次郎	關根善作	小谷野敬三
島村榮之助	中川重政	小室純之助	伊藤仁右衛門	陸軍士官學校		
成田義知	腰塚純一	中府伊勢吉	山崎敬三	吉橋少佐	吉野少佐	金子少佐
大塚利雄	關口政次郎	新井章治	小坂誠庸	町田大尉	西村大尉	二味大尉
鈴木源一	島田愛	安野太平	北原淑夫	寺崎大尉	高野大尉	四王天大尉
深井貞亮	平井平次郎	新井昌平	村本猶太郎	岡大尉	大塚中尉	比留間中尉
金子春吉	坂卷喜市	小島高祖	栗原島三	田村中尉	大塚中尉	比留間中尉
石井良吉	矢田義勝	清水健恕	鈴木茂次	清水中尉	須賀中尉	松崎中尉
鈴木治三郎	田村藤茂	本橋額一	向山茂次	丸山少尉	根岸少尉	原少尉
鈴木宗七	水田孫一	峰川清三郎	高田改平	中央大學		
小暮省三	小林市平	大川保太郎	吉田由藏	石山彌平	石井謹吾	石川三四郎
齋藤善作	大野敬一	飯塚半衛	梁原肅之助	林賴三郎	卜部喜太郎	久米良作
村田喜助	松村清次郎			福田又一	福田辰五郎	丸山俊夫
東京高等商業學校				外國語學校		
市川光太郎	岩出由次郎	春名健之助	橋本明六	設樂真太郎	河島任三	松本隆助
重塚次郎	大谷登喜雄	小野田政次郎	尾高次郎	藤藤三平	島田嘉一郎	糟谷好助
岡田積三	岡田元茂	萩島由太郎	川田長兵衛	梅谷興一	宮本文彌	高辻豐
加藤精一	角谷藤三郎	河田大三九	柿原定吉	大橋完一	增田耕作	田中夏文
粕谷富太郎	只見鐵	高木鐵太郎	瀧澤吉三郎	水產講習所		
中村三郎	長瀧武司	內野英太郎	野原幸太郎	杉浦保吉		
野山榮吉	久米彌太郎	桑田鶴吉	黒田馨助	商船學校		
黒瀬種吉	山内篤	山崎衡助	松本眞平	富岡仁兵衛	塚越禮藏	栗原憲三
増田恒藏	福田辰五郎	福田潤一郎	國分良吉	本郷重治	國分熊男	並木良輔
榎本謙七郎	秋元駒太郎	秋庭義清	坂井匡	山田胤重	富岡彌右衛門	瀧口地哉
齋藤吉十郎	齋藤良清	柴崎雪次郎	諸井巴			金子文右衛門

東京高等師範學校

榎木寛則	芳川修平	寺崎守愛	佐藤孝治
大川平路	中川重時	佐藤貞雄	植村善作
龜井義六	辻七藏	柴崎浪太郎	森利平
池田常五郎	松本教心	秋庭千五百	岸彌重郎
鈴木誠治	大澤彌治	岩澤良太郎	船垣伊太郎
大島全五郎	須永和三郎	平田芳太郎	平澤金之助
中根鷺三郎	志村伴三郎	小松原伊十郎	大塚鷺雄
利根川與作	近藤鐵太	梅林寺勝三	築根喜一郎
友光義三	黒澤省吾	古川常吉	田中寅雄
金井久三郎	宮岡宮次	宮澤寅雄	寶月勇三郎
倉林源四郎	狩野益三	今泉淺之丞	新島白介
東京高等工業學校			
杉田清吉	飯田新三郎	飯橋長三郎	横川周造
小島提郎	高橋泰一郎	洛本租一	馬場章輔
土肥秀丸	堀場秀雄	梅村久磨作	小杉善吉
中島正賢	佐々木高吉	關根嘉介	田中身喜
林準藏	伊佐山傳次郎	春山敏郎	奥住檢吾
池田善四郎	川田郁	大井藤吉	安田藤作
伊佐山房吉	根岸正作	長澤仁作	牧野啓吾
松尾良助	奥泉鶴藏	橋本祐造	

通常會員

(明治四十年四月現在)

(順序不同)

東京帝國大學

北足立郡六辻村大字別所	同郡鳩ヶ谷町字里	入間郡宗岡村	南埼玉郡須賀村大字和戸	入間郡高麗村大字露川岸	同郡飯能町	比企郡大河村	大里郡熊谷町	北埼玉郡禮羽村	北足立郡浦和町	大里郡八基村大字横瀬	入間郡南古谷村大字木目	同郡三芳野村大字小沼	北足立郡安行村	北埼玉郡中條村大字上中條
大野榮三	石田政藏	池内一郎	篠原耐	山本玄	平山慎英	酒井忠政	小島周一	小島義一	畑義三	鳥羽五郎	大河内一	萩野正夫	田中千代松	中村鐵也

埼玉學友會報

第十四號

二十四

北葛飾郡行幸村大字千塚
南埼玉郡篠津村
北埼玉郡豐野村大字
北葛飾郡櫻田村大字上川崎
入間郡東吾野
南埼玉郡岩槻町大字太田
北埼玉郡忍町
南埼玉郡岩槻町
兒玉郡本庄町
南埼玉郡鷺宮村
北足立郡芝村
入間郡飯能町大字小岩井
北足立郡六辻村大字別所
北葛飾郡櫻田村大字中川崎
北埼玉郡星河村大字齋條
北足立郡戸塚村
同 郡中丸村大字北中丸
同 郡吹上村大字吹上
北葛飾郡栗橋町

遠藤 柳作
菱沼 理一
篠塚 和
渡邊 得男
大野 興三郎
田中 豐三
渡邊 秀雄
島田 俊夫
内田 節三
八木 橋樞三
宮 寬
新井 千代之助
山川 一郎
梅田 馨
出井 淳三
松岡 銳作
新井 賢吾
加藤 信一
横田 清三郎
梅澤 純一

北埼玉郡不動岡村
南埼玉郡新堀村
北足立郡拍馬村大字清河寺
同 郡浦和町
秩父郡皆野村
大里郡熊谷町
同 郡寄居町
北埼玉郡三田ヶ谷村大字三田ヶ谷
大里郡妻沼村
北足立郡三室村
大里郡久下村
同 郡中瀬村
同 郡奈食村大字中奈食
同 郡熊谷町
北足立郡美谷本村大字内谷
大里郡奈食村
北埼玉郡鴻巣村大字茅壑
入間郡古谷村

增田 胤治
高橋 隆造
增永 茂重郎
檜崎 主計
金子 喜一
中村 一郎
小池 通次郎
臺 惣三郎
鈴木 一郎
平野 久保
宮城 音五郎
齊藤 三三
鯨井 恒一郎
坂本 修作
水村 宇一郎
石坂 養平
小山 鞠繪
仲 榮壽

南埼玉郡百間村
北足立郡安行村大字領家
北足立郡藤岡町
南埼玉郡柏崎村
實 科
大里郡八基村字血洗島
比企郡西吉見村字北吉見
秩父郡尾田村字時田
南埼玉郡八條村大字八條
兒玉郡共和村吉田林
北埼玉郡田ヶ谷村字道地
兒玉郡青柳村中新里
北埼玉郡埼玉村
大里郡男沼村小島
南埼玉郡慈恩寺村表
比企郡八和田村字中爪
入間郡原市場村

島村 盛助
早船 慧雲
梅谷 興一
石村 政次郎
田口 春吉
吉岡 東作
高橋 喜久司
關根 實之助
太田 常右衛門
山田 良作
渡邊 侯治
戸谷 寛宗
大谷 正一
田中正一
關根 基四郎
本多 利信
大野 正五郎

政治 科
南埼玉郡三箇村大字三箇
北足立郡浦和町
北埼玉郡屈巢村
同 郡三田ヶ谷村大字三田ヶ谷
入間郡川越町
北埼玉郡志多見村字串作
北足立郡白千村
北埼玉郡井泉村大字下組
南埼玉郡江面村北青柳
同 郡柏崎村大字眞福寺
北埼玉郡三俣村大字下三俣
大里郡幡羅村大字東方間
北葛飾郡富多村大字立野
北埼玉郡東村字新川通
入間郡梅園村大字津久根
北葛飾郡櫻田村大字西大輪
北足立郡西新井村大字本木
南埼玉郡柏壁町
法 律 科
北埼玉郡忍町大字忍

萩野 榮藏
柿沼 邦司
藤村 篤治
越塚 長三郎
安部 立郎
酒卷 景一
富澤 英一
吉田 淳
武井 俊次
高橋 一郎
梅澤 重平
栗原 利三郎
松村 義勝
松島 義勝
新井 平三郎
青木 清司
隅山 襄一郎
鈴木 廣
川邊 喜三郎

早田稻大學 (豫科を除く)

埼玉學友會報

第十四號

二十五

埼玉學友會報

第十四號

二十六

大里郡太田村大字太田
入間郡高麗村大字高麗本郷
北埼玉郡新郷村大字上新郷
北葛飾郡杉戸町大字清地
北埼玉郡岩瀬村大字中岩瀬
比企郡北吉見村大字一ツ木
北足立郡六辻村大字沼野
北葛飾郡高野村大字下高野
南埼玉郡菟野町
北足立郡中岡木村大字宮戸
同 郡田間宮村大字大岡
入間郡太田村大字南大塚
比企郡吉見村大字久保田
兒玉郡兒玉町
商 科
兒玉郡兒玉町大字八幡山
北埼玉郡忍町大字忍
同 郡同町大字行田
北足立郡加納村
同 郡馬宮村大字西遊馬
南埼玉郡久喜町大字久喜

掛川良策
新井八郎
佐藤品
關口七郎
入江俊太郎
原麟次
細淵繁三郎
折原英
大塚安藏
高橋元昇
栗原島三
山田房吉
新井正枝
齋藤善作
堀越鶴松
小笠原昇
加藤松四郎
甘樂辨二郎
浪江章
野原淋次郎

入間郡川越町
北埼玉郡忍町大字忍
入間郡川越町
北埼玉郡羽生町大字羽生
入間郡所澤町
北埼玉郡忍町
入間郡所澤町
北埼玉郡豐野村大字杓子木
大里郡深谷町
入間郡吉野村大字鴨田
南埼玉郡柏壁町
高等師範部
文 科
入間郡川越町小仙波
北葛飾郡幸松村大字小淵
北足立郡南平柳村大字領家
國語漢文科
北足立郡本崎村大字本太
兒玉郡兒玉町
大里郡太田村大字原島

丸茂忠郎
小山保孝
齋藤恒清
齋藤朋之丞
北田得禾
湯淺泉
三上理一
篠塚房藏
柴崎研三
關根易三
鈴木易三
岩澤新平
尾花卓之助
鹿嶋増藏
石塚邦俊
春山順太郎
清水健恕

英 語 科

北足立郡新谷村大字榛松
同 郡六辻村大字文蔵
北埼玉郡新郷村大字上新郷
同 郡忍町大字忍
北足立郡浦和町
北埼玉郡東村大字旗中
南埼玉郡岩瀬町大字太田
北足立郡六辻村大字辻
入間郡高萩村大字中澤
北埼玉郡豐野村大字間口
歴 史 科
南埼玉郡菟野町
入間郡川越町
北埼玉郡三俣村大字上三俣
北足立郡片柳村大字南中野
大里郡大蔵村大字廣瀬
同 郡吉貝村大字玉作
法制經濟科
大里郡中瀬村

板橋卓一
飯田綏治
梶田鯉一郎
田村榮藏
田山停雲
青鹿東
荒井俊一郎
新藤光五郎
須ヶ間暹治
田村敬悅
堀部信親
岡田萬雄
梅澤慎六
荒川元四郎
須藤叢三
佐藤鳴彦
河田滿瑳之

北埼玉郡元和村大字琴寄
入間郡所澤町
哲 學 科
北埼玉郡忍町
北葛飾郡幸手町
南埼玉郡水深村
秩父郡大宮町
南埼玉郡岩瀬町大字太田
北足立郡土合村大字西堀
同 郡芝村大字芝
同 郡蔵町
入間郡川越町
秩父郡大宮町
大里郡東吉見村
秩父郡大宮町
南埼玉郡日勝村大字岡泉
入間郡飯能町前田
北足立郡浦和町
兒玉郡大澤村大字猪俣

中島小平
林隆興
目崎得養
竹村彦四郎
神田源七郎
柿原龜吉
高田善次郎
瀧谷南陽
小崎安藏
岡田徳輔
菅間泰
福島蒸三
大山昇平
青木槌太郎
齋藤健一
横田貞吉
相川直輔
卜部直輔

埼玉學友會報

第十四號

二十七

東京高等商業學校

東京外國語學校

北足立郡與野町字上落合
大里郡藤野村字折之日
北葛飾郡杉戸町倉松
大里郡市田村字恩田
北埼玉郡種足村
同 郡志多見村阿見川
入間郡川越町川越
大里郡熊谷町字石原

花俣幸昌
長谷川潔
戸ヶ崎一男
武田辨藏
小池英藏
赤坂芳次
關根齊一
櫻澤忠四郎

豫科

飯島信重
星野米吉
尾崎勝藏
四方田義茂
松本源四郎
鈴木佐一郎
富澤端之
岡部悅治
黒巢龍二

中央大學

經濟學

田中忠三郎
田村衛
根岸善喜
久保秀造

明治大學

北足立郡浦和町岸町
北埼玉郡加須町大字久下

松井良次郎
野本德治

法律科

角田保治
白野市松
竹野谷實作

第一高等學校

秩父郡野村
入間郡豐岡町扇屋五
北足立郡草加町大字東立野六
北埼玉郡手子林村大字下手子林
同 郡須加村三六

岡田恒輔
粕谷俊介
生島莊三
橋本傳左衛門
川島祿郎

大里郡岡部村大字岡
同 郡熊谷町一〇
北足立郡大宮町大字大宮一二八
入間郡精明村大字平松五
同 郡川越町南久保町七〇五
同 郡三ヶ島二〇
北足立郡石戸村大字高尾七八
同 郡浦和町
同 郡木崎村大字本太八六
同 郡六辻村大字別所一
北埼玉郡穗足村大字戸室
同 郡新郷村大字新郷
北足立郡浦和町一二五
秩父郡大宮町大宮
入間郡川越町大字川越
同 郡三ヶ島村大字桃谷三七
同 郡坂戸町大字坂戸九〇
大里郡中瀬村三九
入間郡金子村大字木蓮寺六二
北埼玉郡大澤村大字猪俣
比企郡小見野村大字下小見野一八

埼玉學友會報

陸軍士官學校

比企郡小見野村
入間郡川越町
北埼玉郡岩瀬村
同 郡持田村
南埼玉郡柏壁町
同 郡百間村
北埼玉郡田ヶ谷村
大里郡久下村
同 郡中瀬村
同 郡吉見村

會田福太郎
酒卷貞一郎
鹽谷覺三郎
茂木金藏
關根恒三
關根貫一
須賀英一
筑紫利三郎
金子茂八

島村政治
森脇忠敏
野本正一
長島晋彬
山田良三
山崎庄三郎
木崎多助
島村正美
大家勇七
國島録藏

入間郡川越町
同 郡同町
比企郡中山村
北埼玉郡忍町
南埼玉郡柏崎村
入間郡久下戸村
同 郡豊新田村
同 郡野火止村
北葛飾郡靜村
南埼玉郡三ヶ村
兒玉郡東兒玉村
不明
同
同
同
同
北足立郡吹上村
同 郡上平村
大里郡小川町大字下里

大塚 仁
宮崎 正次
木村 滿次
鹽見 國一
岡田 孝之丞
奥貫 登作
仲 仁吉
新井 宇平
桑島 昇
伊藤 欽吾
須永 俊作
川島 誠一
鈴木 醇
高野 重次
中田 茂
林 聚岩
福島 莊次
穂谷 六三
田中 良平

東京美術學校

大里郡榑澤村大字後榑澤
北埼玉郡忍町大字行田
大里郡熊谷町大字上石原

角田 鶴松
目崎 守義
倉上 政幹

商船學校

北葛飾郡八代町大字中野
入間郡東吾野村大字長澤
大里郡玉井村大字久保島
入間郡霞ヶ關村大字笠幡

小林 要三
大野 仁助
森田 増五郎
神田 和市郎

學習院

北埼玉郡旗井村
同 郡同村
比企郡吉見村
秩父郡國神村

坪井 英勇
坪井 勇雄
根岸 憲助
山田 醇

水産講習所

東洋協會專門學校

大里郡秦村大字葛和田
同 郡御正村大字三本
同 郡同村大字樋春
同 郡武川村大字瀬山
同 郡吉岡村大字高吉
同 郡秦村大字葛和田
同 郡玉井村大字久保島
南埼玉郡柏崎町
北埼玉郡三田ヶ谷村字三田ヶ谷
北葛飾郡豐野村大字藤塚
比企郡小見野村字上小見野
同 郡小川町
兒玉郡神保原村字八町河原
入間郡川越町新田町
同 郡高階村大字砂
兒玉郡松久村大字甘粕
同 郡長幡村大字帶刀
入間郡田面澤村野田

埼玉學友會報

東京高等師範學校

今村 正一
長谷川 録郎
馬場 五郎
馬場 好平
小野澤 武四郎
江和川 晴水
松岡 献
松本 清司
栗原 斐
島村 節
長谷部 正平
馬場 貞一
桑原 政夫
田中 文勝
久住 謹輔
大木 乙五郎
伊井 松藏
府瀬川 熊司

東京工業學校

北葛飾郡靜村大字高柳
兒玉郡榑田村大字葛森
秩父郡中川村大字上田野
入間郡川越町西町
兒玉郡
秩父郡
大里郡
北埼玉郡駒西町
同 郡三俣村大字上三俣
兒玉郡長幡村大字長濱
同 郡藤田村大字牧西
北埼玉郡加須町
秩父郡榑澤村大字下郷
比企郡三保谷村字紫竹
入間郡川越町榑澤部屋町
北足立郡鴻巣町
入間郡宮寺村
同 郡宮寺村
南埼玉郡慈恩寺村字慈恩寺

渡邊 義治
早野 清三郎
笠原 義平
野尻 貞衛
大塚 良治
黒澤 正三郎
黒澤 政治
齋藤 仙三
海澤 治平
立石 四郎
小川 淳一郎
秋山 秀夫
坂本 宗太郎
小島 暉
島越 錦三
山口 良慶
本橋 重治
本橋 彌八
小島 喜三郎

埼玉學友會報

第十四號

入間郡南町字北横町
北足立郡指扇村大字指扇
北埼玉郡忍町
同 郡三田ヶ谷村字三田ヶ谷
入間郡霞ヶ關村字笠幡
北埼玉郡成田村
同 郡

廣本隆壽
伊藤鶴作
古市勉
齋藤貞七郎
發智神太郎
西田萬次郎
中村和

慶應義塾

政治科

入間郡川越町一七一

太田貞巳

法律科

北足立郡片柳村大字南中村五〇

矢部俊治

兒玉郡金屋村大字金屋

倉林周助

北葛飾郡杉戸町

小島常次

理財科

大里郡熊谷町字熊谷泉町

坪井市之助

同 同 三一八

廣田初穂

北葛飾郡彦成村字彦澤

田中隆義

大里郡熊谷町鎌倉町字竹町

新井慶藏

南埼玉郡新和村大字末田二五九〇

田口貞之助

北足立郡浦和町二〇四

眞野秀種

三十二

比企郡七郷村大字越畑七五
兒玉郡丹藤村字元阿保
北足立郡浦和町一一九
北葛飾郡栗橋町
北足立郡新郷村字榎松七九二
北埼玉郡大越村字外野
入間郡霞ヶ關村
南埼玉郡久喜町
北葛飾郡上高野村

市川茂平
鹽川濟吉
石塚勝之助
柿沼襄夫
板橋健三
菅谷隆良
發智太郎
荒井伊平
江森安治

豫科

比企郡出丸村
大里郡妻沼村
同 郡中瀬村
入間郡川越町
比企郡唐子村字葛袋
南埼玉郡久喜町大字久喜
兒玉郡木庄町
北足立郡谷塚村字瀬崎
商工部
北埼玉郡忍町字行田四一
北足立郡浦和町一二二

谷島茂策
茂木雅太郎
河田以備三
前野三郎
野口祿三郎
荒井憲
森田柳三郎
畫間哲
富田助三
松澤眞兵衛

東京高等師範學校附屬中學校

北足立郡浦和町一五〇
入間郡川越町神明町九三
北足立郡小谷村大字小谷三二
南埼玉郡蒲生村字蒲生五四
秩父郡小鹿野町六八
北足立郡桶川町一七三
大里郡太田村大字飯塚
北埼玉郡忍町六二二

野原勝平
小川秋人
長島政義
神谷嘉吉
加藤道也
矢部精
原口貞夫
大藪保夫

獨逸協會中學校

大里郡市田村
北埼玉郡忍町大字行田
入間郡高麗村大字高麗本郷
南埼玉郡越ヶ谷町
北足立郡大門村大字大門
南埼玉郡清久村大字下清久
比企郡南吉見村字大串
入間郡毛呂村字毛呂
同 郡 同 村
大里郡本郷村大字本郷
兒玉郡兒玉町
大里郡幡羅村大字東方
秩父郡名栗村

河野弘
藤江憲藏
小田貞介
石川塚二
大塚五郎
木村善太郎

東京府第四中學校

埼玉學友會報

土生津侃
山下要
伊原秀雄
石山重治
第十四號

三十三

山岸博愛
根岸武雄
新井昌平
山田耕夫
淺野亮
高木渠
山越廣一郎
丸木清
丸木清則
高橋茂一
淺見忠兵衛
高橋重雄
原田操

埼玉學友會報

第十四號

三十四

比企郡高坂村四本宿
大里郡深谷町
北足立郡保谷村大字上保田新田
同 郡浦和町
兒玉郡本庄町
秩父郡皆野村
同 郡下吉田村大字下吉田
北足立郡大石村大字井戸木
秩父郡大宮町
同 郡皆野村大字原
北足立郡藤折村字岡
大里郡熊谷町
同 郡奈貢町字中奈貢
同 郡深谷町
北葛飾郡豐田村字小右衛門
同 郡幸手町
同 郡同 町字牛村
同 郡彦成村字上彦川戸
同 郡上高野村
同 郡八代村字天神島

細村莊人
本間丈四郎
山村文治
平井文平
鈴木貞勝
金子之春
石川誠一郎
市川平一
金子慎吾
比留間計廣
吉原正吉
石坂芳郎
土屋美胤
秋庭耕作
岸本庄太郎
秋間右一
戸張幸助
加藤美壽
糸雅實

北葛飾郡杉戸町字倉松
北足立郡草加町字吉籠原
同 郡川田谷村
同 郡植永村字佐和川
同 郡芝村字佛刈
同 郡藤折村字根岸
同 郡川口町
北埼玉郡中島町
同 郡鴻巣村字半壘
同 郡大越村字大越
南埼玉郡日勝村字爪田ヶ谷
同 郡江面村字北青柳
同 郡潮止村
秩父郡三澤村
同 郡字上名栗
兒玉郡兒玉町
比企郡三保谷村字平沼
入間郡勝呂村字石井
大里郡熊谷町
入間郡高麗村字梅原

戸賀崎潤夫
武内光造
高橋賢次
關根盛司
高岡章藏
高野利平次
吉田仙也
岩田定光
岡安寛司
榎本弘進
齋藤基
中村莊太郎
田中仁重郎
真下要之助
平沼彌太郎
須永繁雄
柿沼吳作
井上確太郎
田島信一
大野六郎

京華中學校

早稻田實業學校

北葛飾郡川邊村米崎
入間郡川越町
比企郡明學村
北埼玉郡忍町行田
入間郡飯能町
同 郡古谷村古市場
同 郡三芳村藤久保
同 郡山田村上寺山
大里郡新倉村成塚
北埼玉郡忍町大字忍
同 郡三保村三保
兒玉郡藤田村
北埼玉郡須加村須加
大里郡深谷町
同 郡明月村明月
入間郡川越町
大里郡椿澤村
同 郡御正村三本

埼玉學友會報

第十四號

三十五

井上勝
市川久次郎
馬場佳輔
橋本喜助
大河原孝吉
鈴木信助
時田傳左衛門
川田順
伊藤泰夫
梅澤久平
相澤公平
須賀一郎
田中源次
茂木與三郎
榎本德三郎
角田龜夫
新井啓三

大里郡奈貢村中奈貢
同 郡市田村大字牛島
秩父郡國神村大字金崎
同 郡野上村大字藤谷淵
兒玉郡東兒玉村阿那志
同 郡兒玉町
同 郡神保原村八丁河原
比企郡福田村山田
北足立郡鳩ヶ谷町浦寺
同 郡同町前田
同 郡浦和町
同 郡保谷村保谷
同 郡指扇村清河寺
同 郡殿町
北埼玉郡加須町
南埼玉郡日勝村爪田ヶ谷
入間郡川角村下河原
同 郡同村西戸
同 郡同村
同 郡原市場村原市場

須藤哲之
金井三郎
小林豐
堀口一郎
齋藤彦二郎
中山秀道
栗原鈞
岩田丹治
宮野三省
柴崎長雄
野口富造
岩崎源兵衛
増永耕三
鈴木包雄
田口滿之助
秋山峯作
齋藤泰
福島正
柴崎義亮
柴崎嘉重
馬場勝藏

京華商業學校

入間郡高麗村新堀
同 郡飯能町
同 郡勝呂村石井
同 郡越生町大谷
同 郡富岡村
同 郡元加治村佛子
同 郡北高麗村上畑

新 四郎治
平 山誠寬
井 上恒治
石 井吉太郎
高 松勤
松 井教爾
宮 倉東作

北葛飾郡杉戸町
北埼玉郡加須町
北足立郡植永村大字佐知川
入間郡川越町
同 郡金子村字根岸
北足立郡大石村字藤波
同 郡草加町
北埼玉郡騎西町
同 郡龍西村
秩父郡名栗村大字上名栗
入間郡三芳村大字上富
同 郡川越町

齋 藤敏
齋 藤真太郎
飯 野三郎
遠 山芳三
大 島重吉
池 田繁治
淺 見恒一郎
齋 藤兵三郎
柿 沼萬之助
岡 部一郎
松 本重次
島 崎仁

立教中學校

南埼玉郡富嶺町
北足立郡草加町大字笹原
南埼玉郡岩槻町
兒玉郡兒玉町字八幡山
入間郡霞ヶ関村字笠幡
大里郡明戸村大字明戸
兒玉郡大字本庄町
北葛飾郡幸松村字小淵
北埼玉郡羽生町
入間郡加治村大字笠縫

今 井銀瓶
島 田欣一
武 内武茂
秋 森喜七
野 澤義三郎
神 田茂
茂 木與三郎
横 村德平
山 田進三
内 山誠一
島 崎與助

商工中學校

北葛飾郡栗橋町
南埼玉郡須賀村
北足立郡田間宮村
北葛飾郡櫻井村
大里郡寄居村
入間郡所澤町
秩父郡大宮町大字大宮

並 木芳八
木 村彌市
奈 良陳三
關 口梧一
酒 井鐵象
肥 沼源吉
柿 原萬三

東京府第二中學校

入間郡所澤町大字久米
同 郡柏原村
同 郡同村
同 郡同村
同 郡吾妻村秋津
秩父郡吾妻村大字坂石
比企郡今宿村字小川

曉星中學校

北足立郡桶川町
北埼玉郡須加村大字須加
大里郡明戸村大字新井

東京府第一中學校

比企郡宮前村大字中尾
同 郡大河村大字青山
北葛飾郡富多村
北足立郡小針村大字羽貴
順天中學校
入間郡飯能町大河原
北葛飾郡榎田村大字八甫

郁文館中學校

秩父郡大宮町
同 郡横瀬村字敷地
同 郡大宮村大字大宮
北足立郡大宮町川越新道
秩父郡白鳥村字井戸

福 島勝藏
齋 藤濱太郎
宮 前進
勝 本政太郎
大 澤喜作

埼玉學友會報

第十四號

三十八

北足立郡新倉村
同 郡大宮町大字大宮
南埼玉郡須賀村
北埼玉郡笠原村大字笠原
南埼玉郡三箇村大字三箇
入間郡宮寺村
南埼玉郡出羽村大字七左衛門
兒玉郡神保原村大字忍保
入間郡入西村大字澤木
同 郡所澤町大字所澤
北埼玉郡南河原村大字大塚
入間郡南高麗村大字上畑
北葛飾郡權現堂川村大字木立
北埼玉郡忍町忍
大里郡明戸村大字明戸
入間郡宮寺村
北葛飾郡三輪野江村大字加藤
南埼玉郡岩槻町

堀江嘉平
穂積文壽
中村虎之助
手島嘉重郎
伊藤覺二郎
葛野武彦
秋山七老
竹内寶
小峯啓助
北村次平
栗原一良
馬場美太郎
稻垣茂一
中野虎雄
根岸本一
葛野朝雄
加藤利
田熊憲之助

京北中學校

秩父郡矢納村
同 郡名栗村大字上名栗

野口佳生
平沼藤八

明治三十八年度會計報告書

收入之部

一月一日 金四百參拾九圓拾八錢 前年度より越

十一月廿一日 金參圓六拾四錢

合計金參百拾四圓貳錢也

支出之部

二月六日 金五拾圓

三月八日 金四拾圓九拾貳錢

三月八日 金拾九圓八錢

十一月十四日 金四拾圓

合計金百五拾圓也

差引

殘金百六拾四圓貳錢也

右及報告候也

明治三十九年十二月三十一日

埼玉學友會會計主任 瀧澤吉三郎

埼玉學友會規則

第一章 總則

第一條 本會は埼玉學友會と稱す

第二條 本會は埼玉縣出身の士相互の交誼を温め緩急相援け互に切磋勉勵し兼て將來就學の便を謀るを以て目的とす

明治三十九年度會計報告書

收入之部

一月一日 金參百五圓八拾貳錢 前年度より越

五月三十一日 金四圓五拾六錢

(第一金銀子)

五月二十六日 金七圓七錢
十月三日 金拾圓八拾壹錢五厘
十月六日 金四圓拾七錢
十一月廿四日 金壹圓五拾參錢
合計金四百六拾貳圓七拾六錢五厘也

支出之部

二月二日 金五拾圓

二月十三日 金四拾圓

二月十五日 金四拾六圓拾參錢

十月十二日 金拾圓八拾壹錢五厘

十一月十三日 金拾圓

合計金百五拾六圓九拾四錢五厘也

差引

殘金參百五圓八拾貳錢也

右及報告候也

明治三十八年十二月三十一日

埼玉學友會會計主任 瀧澤吉三郎

第三條 本會の目的を達せんが爲めに毎年二回會報を發行し且つ優等學生獎勵の方法を採る
毎年二月に大會を開き四月九月十月十二月に通常會を開く但し時宜に依り臨時會を開き若くは會期を變更することある可し

第四條 會員を分て通常特別賛成の三種とす
一 通常會員は東京に留學する學生より成る
一 特別會員は通常會員の資格を有せし者にして既に其學業を卒へたる者より成る
一 賛成會員は學生以外に立ち本會の目的を賛成して助力を爲す者より成る

第二章 役員

第五條 本會の事務を處理する爲め左の役員を置く

- 一 會頭 一名
- 一 會計主任 一名
- 一 幹事 一名
- 一 副幹事 二十五名以下
- 一 評議員 若干名
- 一 編輯委員 若干名
- 一 委員 若干名

第六條 會頭は會員の決議に依り之を推戴するもの

幹事は會の總務を掌り且重大なる事件は評議員會の決議を経て之を實行し副幹事は幹事の事務を補助す

編輯委員は會報編輯事務を擔任す

委員は各自其學校に在る會員に關する事務を分掌し兼て幹事の事務を輔く

第十一條 評議委員は幹事副幹事會計主任編輯委員及評議員を以て之を組織し必要の場合あるときは幹事之を招集す

評議員會の決議は會頭の認可を経可きものとす

第三章 入會及退會

第十二條 本會へ入會せんと欲するものは原籍氏名宿所を詳記し其旨を幹事に申込む可し但し學生は所屬學校及學級を記入することを要す
轉居、改名、退學、轉校及退會は必ず之を幹事に届出づ可し

第十三條 本會々員にして本會の體面を損するものあるときは評議員會の決議を経て退會を命ずることある可し

第四章 會費及雜則

埼玉學友會報 第十四號

とす

第七條 會計主任は評議員會に於て特別會員中より之を推薦し會頭之を任す

幹事副幹事は評議員會に於て會員中より之を選定し會頭之を任す

編輯委員は評議員會に於て會員中より之を選定す
評議員は特に本會に功勞ある會員中より會頭之を指名す但し通常會員より十五名以下特別會員及賛成員より十名以下とす

委員は通常會員中に於て各學校より一名乃至二名之を互選す

第八條 役員任期は會頭を除き凡て一ケ年とす其改選は毎年九月之を行ふ但し再選することを妨げす

事務の引繼は改選後一ヶ月以内に於て之れを爲す可し

委員改選期に先て其所屬の學校を去る時は豫め適當の後任者を指定し幹事の承認を経て事務の引渡を爲す可し

第九條 會頭は本會を總理す

第十條 會計主任は基本金を保管し兼て會計を監督す

第十四條 會員は會費として三、九月の兩度に分て

毎年金拾貳錢を納む可し其他通常、臨時及大會の會費は其の都度之を定む

開會の通知を受けて無斷缺席するものは其理由の如何を問はず會費全額を納む可きものとす

第十五條 本會の目的を賛成して金員物品等の寄贈あるときは本會より受領書を送り金員は會計主任の名を以て第一銀行に預金し圖書物品等は事務所に保存し會員の縦覧に供す可し但し寄附金は基本金として保存すると雖も必要の場合には評議員會の決議を経て之を使用することを得

第十六條 本則は評議員會の可決を経通常、臨時大會出席者三分の二以上の賛成を得るに非れば之を變更することを得ず

本會役員

會頭	男爵 澁澤 榮一
會計主任	瀧澤 吉三郎
幹事	法科大學生 渡邊 得男
副幹事	高等商業學校學生 澁谷 南陽

編輯委員

主任

委員

同

評議員

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

法學士

文科大學生

第一高等學校生

早稻田大學文科生

法律學士

工兵大尉

醫學博士

商業學士

農學士

醫學士

法學士

文學士

工科大學生

法科大學生

法科大學生

高等商業學校學生

早稻田大學生

諸井四郎

島村盛助

石井昌資

小林昌資

志方一

福田又一

四王天延孝

卜部喜太郎

本多靜六

關根善作

林丹

伊丹繁

長島隆二

辻村鑑

阪本修作

宮藤寬

遠藤柳作

目崎得養

藤村篤治

通常會員

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

早稻田大學生

同

第一高等學校生

高等師範學校生

高等工業學校生

中央大學

美術學校生

慶應義塾生

醫學士

工科大學生

農科大學生

高等商業學校生

第一高等學校生

同

高等工業學校生

學習院

商船學校生

士官學校生

外國語學校生

東洋協會學校生

柿沼邦司

青木清司

宮崎一

田中文勝

立石四郎

山上謙吉

永田二郎

江森安治

高橋隆造

齋藤三三

田口春吉

小崎安藏

齋藤馨之助

若山德

發知神太郎

山田醇

武島友義

木崎多助

大橋完一

桑原正夫

通常會員

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

高等師範學校生

水產講習所

東京師範學校生

早稻田大學法律科

早稻田高等師範部

早稻田專門部

早稻田大學豫科

中央大學

慶應義塾生

渡邊雄義

角田鶴

小林豐

關口七郎

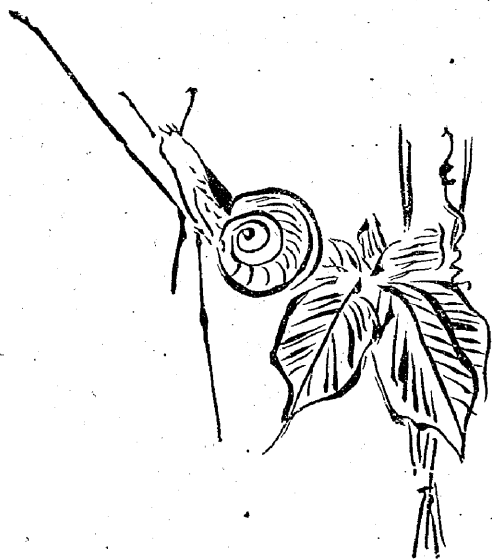
梅澤慎六

新井平三郎

淺見光三

富澤端之

菅谷隆良



明治四十年七月二十八日印刷
明治四十年七月三十一日發行

編輯者兼
發行者

渡邊 得男

東京市牛込區砂土原町三丁目二十一番地
埼玉學生誘掖會内

東京市日本橋區兜町二番地
東京印刷株式會社

印刷者 金澤 求也

印刷所 東京市日本橋區兜町二番地
東京印刷株式會社

埼玉県立図書館



31046305